

テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム（下）

——書簡上の「経済論争」の真相を読み解く——

中 川 辰 洋

目次

はじめに

1. テュルゴーとヒュームの出会いと意義
2. テュルゴー＝ヒューム往復書簡とその周辺
3. テュルゴー＝ヒューム「経済論争」の真相とインプリケーション

(1) 論争の経緯と争点

(2) 「間接税」めぐる争点——テュルゴーはフィジオクラート派か？

(以上, 前号／以下, 本号)

(3) 外国貿易論の争点——「貿易の嫉妬」とは何か？

むすびにかえて——テュルゴー・ヒューム・スミス——

参考文献

付録 アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーおよびデイヴィッド・ヒューム年譜

(3) 外国貿易論の争点——「貿易の嫉妬」とは何か？

すでにみたように、テュルゴーはデイヴィッド・ヒュームの『政治論集』第2版に収録された「貿易の嫉妬」についての評価——ありていにいえば、政治と経済の緊張関係を克服するイギリスモデルへの失望と不信を表明することをためらわなかった。貿易問題は本書初版の「貿易収支」において、貿易禁止措置を通じた他国の犠牲のうえで正貨や地金の蓄積に誘惑された国家の自己破壊的性格を紹介していたが、ヒュームはこれをさらに一歩進めて「貿易の嫉妬」において自国と自余の貿易パートナーが相互にメリットを享受することを解き明かそうとした。

なるほど、ヒュームが貿易規制は結局のところ“ゼロサム・ゲーム”でしかないと言った——と見つけたアントイン・E. マーフィーは正しい⁴⁹⁾。ただし、国家間でオープンな対話が維持され、かつ貿易が自由に行われるところでは、それぞれの国の産業は他国の貿易規制の改善からも進歩を手にするはずである。自由な国際貿易の増進はいわば“プラスサム・ゲーム”だからである。

それゆえここで必要なことは自由貿易の長所を推奨し、国家同士が相互に嫉妬に駆られてなす愚かな行いを廃絶することの大切さを証明することである。ヒュームにしてみれば、一国の産業が隣国の繁栄によって傷つけられることはない。それにまた、貿易部門がいかなる国家ないしは王国においても重要であることに疑いを入れない。だから、他国への嫉妬はこれを排除しなければならない。自国産業の成長は外国との貿易の土台をつくることにつながるというのである⁵⁰⁾。

しかるに、テュルゴーがヒュームに宛てた1766年7月23日付書簡の意図は、イギリスの目指す国際貿易が自国と自余の貿易相手国が相互にメリットを享受する平等互惠どころか、貿易政策が領土・植民地の拡大、ひいては「大英帝国(Imperium Britannicum)」の発展のための手段となっているというまぎれもない事実を直視するよう訴えるところにあった。この点、先に示唆するように、テュルゴーは大ピットこと初代チャタム伯ウィリアム・ピットの北アメリカ植民地・外交政策に批判的であり、遠からず植民地政策の変更を余儀なくされるものと考えていた。

案に相違せず、イギリス政府は1775年4月宗主国からの独立を目指す北米東部沿岸13植民地と戦端を開くが、戦の効なく3年後の1778年に独立派との間で条約を結び終戦と独立を承認した。奇しくも、独立戦争開戦時のフランス行政政府の長は北米植民地独立支持派のテュルゴーであった。それゆえ、国内の反英勢力は開戦当初、アメリカ独立戦争がイギリスの弱体化の好機とみて独立派を積極的に支援するようテュルゴーに迫った。ところが時の財務総監は、戦争

49) Murphy [2008], p. 114.

50) Hume [1752], p. 68.

の当事国ではないフランス王国が独立派に肩入れするのは「漁夫の利 (pêche en eau trouble)」を得る行為に等しく、かつ政治倫理の面からみて決して許されるものではないといって国王ルイ 16 世ら反英国派や親植民地独立派に剣突を喰らわせるのであった。結局、それが遠因となってテュルゴーは政権発足から約 2 年後の 1776 年 5 月国王ルイ 16 世によって財務総監の職を解かれることになる。世にいう「テュルゴーの失脚 (disgrâce de Turgot)」である⁵¹⁾。

一方、ドーバー海峡の対岸のイングランドでは、この年の 8 月にヒュームがエジンバラで死去、その少し前の同年 3 月アダム・スミスは『国富論』を刊行している。そのスミスであるが、テュルゴーと同じくらいイギリスの植民地政策や対外経済政策に批判的であったことは、テュルゴーが政界引退後の 1778 年 3 月 22 日に志を同じくする友人の英国教会に属さない宗教家・哲学者リチャード・プライス博士に送った書簡の文面からうかがい知ることができる。

話を先に進めよう。テュルゴーによる「貿易の嫉妬」への批判は、政治と経済の緊張の克服が容易ならざるものでありながら、当のヒューム自身が楽観的な——あまりに楽観的な見通しを立てていたことに起因するといえるかもしれない。しかしながら、ヒュームの貿易論は根本的かつ致命的な欠陥を内包していた。ひとつは外国貿易と国際収支との関係であり、いまひとつは外国為替取引における貨幣の機能と役割に関するものである。

既述するように、ヒュームは『政治論集』の「貿易収支」の章で、外国貿易と外国為替との関連について言及している。有名な「物価正貨流出入メカニズ

51) この点を理解するうえでオーギュスト・ブショーの「テュルゴー追悼演説」は有益である。すなわち、1774 年 8 月に財務総監に就任したテュルゴーの一連の改革への不平・不満はすくなくなかったが、1775 年に開始されたアメリカ独立戦争における東部沿岸英領 13 植民地の独立支援活動も争点のひとつであった。なかでも国王ルイ 16 世は七年戦争 (1756-63 年) の屈辱を雪ぎ、父ルイ 15 世の名誉回復と王国の再興の好機とみて植民地独立を支援すべきであるとかれの財務総監に強く迫った。テュルゴーがアメリカ独立の支持者であることを国王が知っていたからである。ところが、テュルゴーは国王の意を酌むどころか、反対に戦争当事国ではない第三国の行政府の長たるものが当事国の一方に肩入れするのは政治的にこのまあいとはいえず、あくまでも「中立」を保持すべきであると真っ向から反論した。このため、国王と財務総監との確執と不和が昂じ、ルイ 16 世をして最終的に自身が任命した財務総監の解任を決意させるに至ったのである (Bouchot [1846], pp. 60-1)。

ム (price-specie flow mechanism of balances of payment)」が、それである。例えば、一国の正貨（金銀などの貴金属）の増加は国内の貨幣供給量の増加とそれともなう物価水準の上昇、その結果として貿易上の競争力の低下をきたす。このため貿易収支が悪化（赤字化）、つれて正貨流出を惹起し、当初の正貨増加分が失われる。ところが、正貨流出は国内の貨幣供給量の減少とそれともなう物価水準の低下、その結果としての諸外国との交易条件（競争力）の改善と貿易収支の黒字化、そして正貨の増加をもたらすことになる⁵²⁾。

ヒュームの『政治論集』の刊行に遅れること3年、1755年にヴァンサン・ド・グルネーとかれの協力者らの手によって公衆に供されることになった『商業一般の本性に関する論説』（以下、『商業論説』と略記）のなかで、著者のリシャール・カンティヨンは国際収支について論理整合的に考察している。だが、そのオリジナル草稿が1720年代末から30年代初頭に起草されたことに思いを致せば、ヒュームを国際収支へのマネタリーアプローチの嚆矢と持ち上げ、いわゆる“前期的マネタリスト (proto-monetarist)” だの“マネタリズムの先駆者 (précurseur du monétarisme)”⁵³⁾ だのと評価するのには無理がある。ありていにいえば、まったくの思い過ごしでしかない。

もとよりそれは、トマス・メイヤーやフィリッポ・チェーザラーノらのようなミルトン・フリードマンと“シカゴ・ボーイズ (Chicago Boys)” の先駆けという評価自体が、『金で買えるアメリカ民主主義 (*The Best Democracy Money Can Buy*)』の著者グレッグ・パラスト——自身もかつてフリードマンを“グル”と仰ぐ“シカゴ・ボーイズ”の一員だった——の喝破するとおり、いまとなつてはヒュームにとって称号でも榮譽でもなんともないから、というだけではすまない。ヒュームの国際収支論そのものに致命的難点があるからにはほかならない。すなわち、ひとつには、ヒュームが国際収支を「貿易収支」一本しかみていないのに対して、カンティヨンはこれを貿易収支と資本収支の和と正しく定義していることである。

52) Hume [1752], pp. 57–60. なお、ヒュームの解説として、渡辺 [2012] が簡便である。

53) Dostaler [2012a], pp. 55–6.

いまひとつ、両者を区別するより大きな相違点は、ヒュームと異なりカンティオンが「貿易財」と「非貿易財」とを明確に区別しつつ正貨の増減、したがってまた一国の貨幣供給量の増減の物価に及ぼす影響を考察したところにもとめられる。カンティオンの曰く、「貨幣の増加は、商品や物品の〔外国への〕輸送がゆるさされているときに生じ、その輸送費の差額分だけがこれらの商品や物品の価格を押し上げる」⁵⁴⁾。

さらに、カンティオンは「開放経済 (open economy)」体制のもとでは貿易相手国同士が取引するのは財・サービスだけではないと、これまた正しく主張している。貨幣もまた一般商品やサービスと同じように市場での取引対象となること、そしてそれが外国為替取引や銀行のオペレーションに変化をもたらすことを論理斉合的に展開している。ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズのいように倣えば、ヒュームもカンティオンも「一国の貨幣は急速に増加または減少するものと想像している〔が〕、ヒュームはこの問題に漠然とした文学的優雅さをもって論じているのに対して、カンティオンの場合は、物価におよぼす影響を当代の〔ジョン・エリオット・〕ケアンズあるいは〔アントワヌ・オーギュスタン・〕ケールノーのような科学的正確さをもって分析している」ということになる⁵⁵⁾。

54) Cantillon [1755], p. 125. 要するに、カンティオンによれば、貿易財の価格は非貿易財のそれに輸送費用を上乗せした分だけ高くなると定義されるのであるが、かれは本文で引用したフレーズのあとでこういつている。すなわち、「多くの場合、〔貿易財〕の輸送に取り引きされる商品の価値以上に費用がかかるので、木材は多くの場所で役に立たないものである。〔外国貿易上の〕輸送の問題が存在するからこそ、牛乳やサラダ菜や狩猟の獲物などは首府からはるかに離れた遠隔の地ではまったく価値を有さないのである」(Idem)。なお、以上の点については、さしあたり、Brewer [2009]; 中川 [2016] をあわせて参照されたい。

55) Jevons [1881], p. 353. 訳 86 ページ。ちなみに、アントイン・E. マーフィーもジェヴォンズと同様にこの点を重視する研究者のひとりである。それによると、すでにみたように、ヒュームは貨幣中立説の見地から経済への実質的影響はないと説いたが、「貿易収支」の章では、金匠・銀匠、個人銀行などが当座貸越や紙幣・商業手形を用いた信用創造によって企業者の事業資金を提供したり、株式発行による資金調達を行うことを一定程度評価するようになった。マーフィーも引用しているが、ヒュームは 1749 年にモンテスキューに送った書簡のなかでこういつている。すなわち、「銀行は利便性に富んでいますが、しかしそれらがことさら大きな価値をもっているかどうかと問われるなら疑問です」(Hume [1955], p. 188)。それというのも、近代商業

ここまでみてくれば、ヒュームが『政治論集』の執筆のさいカンティヨンの草稿に目を通したというフリードリヒ・A. フォン・ハイエクの主張はいかなる根拠にももとづかないといわなくてはなるまい⁵⁶⁾。万が一ハイエク説が正しいとすれば、あのように中途半端な貿易収支論にはならなかったはずである。そればかりか、ジェヴォンズのいうように、そもそもヒュームの著作が「相互に連絡のない論文のよせあつめのようなもの」にはならなかったであろう。だからであろうか、マーフィーは『政治論集』に比較的高い評価をあたえながらも国際収支から資本収支を除した理由として、ヒュームが金融市場の発展や金融機関の提供する金融商品・サービスの変化を理解し得なかった問題をあげたことは正しいとさえいえる。それだけではない。はたしてそのようにいうことが許されるとすれば、その根底にヒュームの貨幣論が致命的欠陥を有していたという事実を認めなければならないであろう。

が紙幣と銀行信用の利用から利益を生み出しているということを事実として認めなければならないにしても、金銀が貨幣の基礎であると信じて疑わない限り、「流通貨幣量を超える正貨を積み増しすることなどできない相談です」(Hume [1752], pp. 58)という結論に至るのは当然といえは当然だからである。それにまた、ヒュームの新しい金融の世界に対するどちらかというとながティブな感情は、若き日のテュルゴーがロー・システムの基礎にある紙幣発行に抱いた不信感を隠そうとしなかったことに似ていないこともない。テュルゴーの曰く、「国王陛下[ルイ15世]が金貨や銀貨の代わりに紙幣(papier-monnaie)を用いるとはまったく考えられません」(Turgot [1749], p. 147)。かくいうテュルゴーではあるが、後年は宗旨替えて銀行による信用業務を評価するようになった(中川[2013](とくに付論Ⅱ「テュルゴー利子論への補遺」)を参照されたい)。

- 56) ヘンリー・ヒッグズがジェヴォンズによるカンティヨンの「(再)発見」から半世紀が経過した1931年に王立経済学会から英語版『商業論説』を刊行したが、ハイエクはその翌年「カンティヨン『商業論説』について」と題する論文を、4年後にはベルギーのジャーナル誌『ルヴュ・デ・シアンス・エコノミーク(Rvue des Sciences Economiques)』に「カンティヨンの生涯と作品」を寄稿している。このほかにも、ハイエクは夫人のヘラ(のちに離婚)によるドイツ語版『商業論説』の刊行にさいして「序文」と「解題」を寄稿している。一時期とはいえハイエクはカンティヨン研究者として通っていたが、ヒュームがグルネー・サークルのメンバーらの手になる『商業論説』が出版された1755年以前に、カンティヨンの複数あったといわれる草稿のひとつに目を通していたと主張していた。だが、マーフィーはヒュームの国際収支論における所説がカンティヨンの所説とすくなく異なることからハイエクの主張に疑義に唱えていた(例えば、Murphy [2009], pp. 105-6を参照されたい)。筆者はマーフィー説を全面的に支持する。ことほどさように、今日ではハイエク説を支持する研究者はまず存在しない。ありていにいえば、ハイエク説は最良の引き倒しでしかない。

すなわち、ヒュームは『政治論集』の「貨幣」論において「貨幣は計算単位（unit of account）」でしかなく、経済活動のプロセスで中心的かつ積極的な役割をはたすことはないと信じて疑いを入れなかった。いわゆる「貨幣の中立性（neutrality of money）」論である。この点、貨幣の積極的役割と信用創造の有効性を主張したジョン・ローはもとより、経済学最重要概念である「資本」の生成と成立に多大の功のあるサー・ジョサイア・チャイルド、ヴァンサン・ド・グルネーそしてテュルゴーとも明らかに異なる⁵⁷⁾。

そしてこの問題をさらにつき詰めていくと、貨幣論、資本論や利子論の根底にある諸問題に立ち至らざるを得ないのであるが、いまここでそのような問題を取り上げる余裕がないだけでなく、取り上げること自体本稿のテーマを超えることになる⁵⁸⁾。それゆえ、ここではさしあたりテュルゴーが1767年3月ヒュームに送った書簡で指摘するもヒュームが答えなかった「貿易の嫉妬」への疑念を手掛かりに、ヒュームの外国政策論、貿易収支論、外国為替論の底流に無視しえない決定的かつ致命的な問題が存在するという事実を指摘するにとどめることにしたい。

むすびにかえて——テュルゴー・ヒューム・スミス——

以上、テュルゴーとデイヴィッド・ヒュームとが取り交わした書簡における「経済論争」の顛末について考察してきた。ふたりは1863年の出会いこのかたのたがいな友情と敬意にもとづいて交友しながらも、哲学、文化、歴史の分野とは異なり、経済問題については知見や理解を異にし、後々まで変わることがなかった。その根底には、テュルゴーよりもむしろヒュームの側に相手の考えに対する誤解あるいは無理解があったことを認めなければならない。そしてそれは、『政治論集』が「マクロ経済分析」に貢献する要素が仮にあったとしても、

57) さしあたり、中川 [2013, 2016] を参照されたい。

58) テュルゴーの利潤論、利子論、地代論の相互関連については、さしあたり、Ravix et Romani [1991] を参照されたい。また、邦語文献としては、黒木 [2018] が示唆にとむ。あわせて参照されたい。

同書第2版に収録された論文「貿易の嫉妬」を最後に経済分析に意を注ぐことがなかったがゆえに、英仏の経済事情の諸変化、こういってよければ生まれ出る経済の新事情を観察し論理整合的に理解し書き留めどめることができなかった結果であるといわなくてはならない。

別言すれば、ヒュームは目の前で生じつつある事態に対峙することによって『政治論集』における論稿のいくつかを場合によっては見直しリライトする必要があったと考えられる。グルネー・サークルのメンバーの手によって1755年に日の目を見た『商業一般の本性に関する論説』（以下、『商業論説』と略記）のなかでリシャール・カンティヨンが従前のテキストにはなかった貨幣と価格メカニズム、企業者、所得流通フロー、国際貿易などの理論分析は、自説を見直すさいの有益な材料であったはずである。ことほどさように、カンティヨンのテキストの編集・校訂に携わったといわれるテュルゴーはもとより、アダム・スミスもまた、ウィリアム・スタンレー・ジェヴオンズやヘンリー・ヒッグズが「経済学の最初の論文」と持ち上げたアイルランド出身の国際的銀行家の所説からすくなくならぬ着想を得ていることは、周知の事実である。

しかるに、ヒュームがテュルゴーに“フィジオクラート派”のレッテルを貼って批判したのは、カンティヨンのテュルゴーへの影響の痕跡を考えれば、そしてカンティヨンおよびテュルゴーのスミスへの影響を考えるならば、あまりにも不合理で理不尽といわざるを得ない。実際、例を挙げれば、スミスが『国富論』において「資本」に相当するタームとしてプリテン島土着の単語である“stock”とともにラテン語の“capitalis”を語源とする“capital”を併用するようになったのは、スミスがパリでテュルゴーと出会った1766年以降のことに属する⁵⁹⁾。

59) この点については、Lundberg [1967]; Gallais-Hammono [1982]; Hoyng [2015] を参照されたい。スミスが『国富論』の執筆に取り組んだ1760年代前半の稿といわれる第1篇では“stock”を「資本」に相当するタームとして用いていたが、バックラー公爵のヨーロッパ旅行に随行してパリでテュルゴーらと出会ってこのかた、ラテン語語源の“capital”を併用するようになったこと、しかもこの用語の使用のあり方も従来とは大きく異なることをはじめて明らかにしたI. C. ルンドベリの研究を受けて、ジャンヌ・ギャレ＝アモノは言語学とりわけ「構文論 (syntax)」の手法によって『諸省察』と『国富論』との間の語法や文章スタイルなどの符合と異同を踏み込んで分析した。そして、アンヌ＝クレール・ホイングは新たに発掘された歴史的資料（文書、

価格メカニズム論もしかり。価格メカニズム論がカンティオンを嚆矢とすることはいまや定説となっている。スミスが価格メカニズムを論じているのは、カンティオンのテキストを、あるいはカンティオンの価格理論を発展させたテュルゴーの『富の形成と分配に関する諸省察』（以下、『諸省察』と略記）を読んだ証である⁶⁰。ただしスミスのいわゆる「見えざる手（invisible hand）」に導かれて「みづからは意図していなかった一目的〔社会一般の利益の増進〕を促進することになる」⁶¹のくだりは、カンティオンでもテュルゴーでもなく、ヒュームもパリで手にしたことのある、『貨幣論（*Della Moneta*）』（1751年刊）を著したナポリ王国出身のフェルディナンド・ガリアーニのいわゆる「いと高いところの御手（la suprema mano）」⁶²に示唆を得ていることは明らかである。スミス

書簡など）の解説を通じて先行研究の正しさを実証した。ちなみに、中川〔2018; 2019b〕はこれらの先行研究をもとに、テュルゴーとアダム・スミスとの交友関係の経済学の古典形成への貢献を考究したものである。あわせて参照されたい。

60) アントイン・E. マーフィーは「アダム・スミス『国富論』第1篇第7章「諸商品の自然価格と市場価格について」における「資源分配」論をカンティオンから借用していることは明らかであるがスミスはこのことを認めていない」（Murphy〔1997〕, p. xxii）といっている。また、アントニー・ブリュワーもスミスの問題点を認めたうえで、カンティオンの市場価格と内在価値との区別は、スミスやデイヴィッド・リカードウなどの古典派経済学者の著作における市場価格と自然価格、あるいはカール・マルクスの市場価値と「市場」生産価格との相違と明らかに同一のものである」（Brewer〔1986〕, p. 63）とのべている。

61) Smith〔1776〕, p. 423. 訳 388 ページ。

62) Galiani〔2005(1751)〕, p. 101. ガリアーニの謂いとは、人間の営みが最終的には「いと高きところの御手」——YHVH または Deus——によって導かれてしかるべきところへ導かれるほどの意味である。かくいうガリアーニ神父に対して、テュルゴーは敬虔なカトリック教徒ではあったけれども、それが政治経済の研究であれば、決して神を語ることはなかった。世俗主義を貫いたといつてよいであろう。その意味では、ガリアーニのいわゆる「いと高きところの御手」に同意することはなかったであろうが、テュルゴーのガリアーニ『貨幣論』批判がそれに尽きるものではなかった（であろう）ことは、ジャン・ルロン・ダランベールの熱烈な支持者で作家のジュリー・ド・レピナス嬢に宛てた1770年1月26日付書簡が教えてくれる。それによると、テュルゴーはガリアーニの「文体と形式の巧妙さ、独創性、心地よさ、そして実に綿密な論法が混在している」点をほめたのち、「〔ガリアーニは〕人間が生活の糧を得るために用いる手段についての本を書く際、第1章を足のないひとからはじめる書き手に似ています。あるいは、三角形の特性を論じるために、最も単純な三角形として白い三角形からはじめ、つぎに青い三角形、そして赤い三角形等、と論じていく幾何学者に似ています」と酷評している（Turgot〔1770〕, pp. 420–1. 本書簡はモルレ神父の回想録にも収録されている〔Morellet〔1821〕, p. 331. 訳 290–1 ページ〕。

自ら外国の事情や知識は『国富論』刊行100年を記念して新版『国富論』の編集・出版に携わった19世紀英国の経済学者ソロルド・ロジャーズのいうように、フランス語とイタリア語のテキストから仕入れていたのが事実であるとすれば、かれが当時在仏ナポリ王国大使館付書記官（のちに公使）の作品を読んだであろうことは推測可能である。

なお、念のため付言しておくなら、といっても諸賢はすでにお気付きと察するものであるが、カンティヨンの考える「社会一般の利益の増進の促進」は、自ら危険（リスク）を冒して商品の生産から売買に至る経済活動を行う企業者の、いうなれば「見える手（main visible / visible hand）」によってなしとげられるといつてよいと思われる⁶³⁾。

それにまた、テュルゴーは1769年の作（ただし未定稿）といわれる「価値と貨幣」のなかで引用した「あらゆる価値の共通の尺度は人間である（La commune mesure de toutes les valeurs est l'homme）」というアフォリスムがガリアーニのものと考えられているものの、じつは古代ギリシャのトラキアはアブデラの人プロタゴラスの有名な金言——“Omnium rerum mensura est homo（人間は万物の尺度である）”に近似しているとの解釈も散見される。はたしてそうであるとすれば、これにつづくわれらがソフィストの“et earum rerum, quae sunt, exsistentiae [mensura], et earum, quae non sunt, inexistensiae（在るものについては在ることの〔尺度〕、在らぬものについては在らぬことの〔尺度〕）”を知れば、「貨幣貸付に関する覚書」におけるテュルゴーの価値論の理解は思いのほかむづかしくはないはずである。テュルゴーの曰く、「〔交換価値は〕ふたりの交換当事者のもつ欲求あるいは欲望を享受するために交換する物品の効用の度合いに対する〔交換時点での〕意見にのみ依存するにすぎません。すなわち、価値はそれ自体いかなる実在性（réalité）も有するものではないのであります。〔ただし、後刻〕ふたりの交換当事者の一方が他方に対して不正を働いたと主張する〔ケースが仮にあったとしても、これを正す〕根拠にはならないのです」（Turgot [1769], p. 175）。ちなみに、モルレ神父のオーダーでテュルゴーが執筆したこの論文をもしヒュームが読んだなら、もっともかれ自身は価値論には宿敵フランソワ・ケネーと同様まったくといっていいほど興味もなかったようであるが、それでもどのような感想を抱いたであろうか——知りたいところである。なお、手塚壽郎は上記『貨幣論』をガリアーニの作であることに疑義を唱えた第2次世界大戦前が国唯一無二の研究者として特記されねばならない（手塚 [1929]）。もちろん、かれの所説はのちに否定されるが、当時欧米ではくだんの著書の作者がガリアーニ以外の人物とする支持者が比較的多かったようである。

- 63) カンティヨンの価値・価格論は商品の価格ないし「内在価値」——商品の生産に要する土地と労働量の大きさ——の決定を一時接近であるとすれば、二次接近として内在価値と市場価格との乖離、そしてその乖離の調整者としての「企業者」の機能や役割を分析するという構成になっている。カンティヨンは企業者を自ら危険を冒して市場の調整者たる反面、かれらは「その職業上可能なことはなんでもごまかし、

その『国富論』を寄贈されたヒュームは、1776年4月1日礼状を送ってスミスの労を贅えている。曰く、「Euge! Belle! (ブラボー！ ついに完成しましたね！) わが親愛なるスミス君、貴君が著書を刊行したことを、小生とても嬉しく思います」⁶⁴⁾。時あたかもヒュームが鬼籍入りする4カ月前であった。『国富論』の内容にかかるコメントがないとはいえ、ヒュームの体調や健康状態に思いを致せば、これ以上の言葉を期待することはできなかったであろう。

それはさて置き、ここで特記すべきことは、スミスの経済理論や経済事情に関する理解がヒュームの『政治論集』の域をはるかに超えていたという事実である。それは、既述するように、スミスひとりの功というよりは、カンティヨン、ケネー、テュルゴーらの議論に影響を受け、それらを取り入れて自説を作り上げていった成果である。ただスミスは認めないであろうが、サー・ウィリアム・ペティやサー・ジョサイア・チャイルド、さらには名著『経済学原理 (*An Inquiry into the Principles of Political Economy*)』の著者で同郷のサー・ジェームズ・テュアートの所説も加味しなければならないであろう⁶⁵⁾。さもなければ、いちじるしく公平を欠くことになりかねない。

しかしながら、なんといってもキーパーソンはテュルゴーその人であり、それはスミスがテュルゴーの『諸省察』のなかで登場する議論を『国富論』に取り込んでいることを考えれば容易に理解できる。マーク・ブラウグ（ブローグ）が、『国富論』の最初のふたつの篇のスケルトンがテュルゴーの『諸省察』のな

また顧客に一杯食わせよう」という連中であるという。はたしてそうであるとすれば、市場の調節者としての機能を失うであろうし、反対に企業者たちが「リスクテイク者としての経験や勤勉や才覚に依存して行動すれば、市場の調整者たり得る」(Cantillon [1755], p. 31)。要するに、企業者が自らの経験や勤勉や才覚に依存して行動すれば、市場は調整機能をもつが、そうでなければ調整機能を失う。これを「市場の失敗 (market failure)」と呼ぶならば、市場はいつ機能不全を来しても不思議ではない、いわばカモの浮き寝のような落ち着きのない不安定なものと考えられていたといつてよいかもしれない。

64) Greig [1932ii], p. 311.

65) 世にいう「ステュアート隠し」である。この問題に関しては、さしあたり、馬場宏二「資本・資本家・資本主義」(2008年)を手掛かりにテュルゴー資本論の意義を論じた拙稿「『資本』概念成立探求——馬場宏二『資本・資本家・資本主義』を中心に——」(2012年、のちに中川 [2106] に収録)を参照されたい。

かにあると見付けたのもゆえなしとしない。

ただし、そのスミスの読んだ『諸省察』が、フィジオクラート派の機関誌『市民日誌 (*L'Ephéméride du citoyen*)』に1769年末から翌70年1月にかけて分割連載されたいわく付きのテキストであったか、それともティルゴーが同誌の編集に携っていたピエール＝サミュエル・デュボンに指示して作成させたオリジナルテキストどおりの小冊子(抜刷)であったかは不明である。

その意味するところはこうである。すなわち、テュルゴーの原稿を同誌に発表するよう勧めたのは、当時『市民日誌』の編集に携わったデュボンであったが、かれが掲載にさいして著者に無断で原稿の中身を改竄したため、テュルゴーは怒りデュボンに宛てた1770年3月23日付書簡のなかで“オリジナルテキスト”の抜刷150部を別途作成し、これを著者自らの作成した寄贈先一覧にある人物に送付することを要求した⁶⁶⁾。

66) Turgot [1770c], pp. 382-3 および Turgot [1770d], pp. 385-6. テュルゴーは1770年3月23日デュボンに宛てた書簡のなかでオリジナルテキスト通りの『諸省察』の「抜刷 (tirage à part)」を150部作成することを要求、一方の同年3月29日付書簡では「抜刷」の寄贈先を知らせている。以下が寄贈者である。すなわち、フランソワ・ケネー博士、アンドレ・モルレ神父、ニコラ・ボードー神父、ミラボー侯爵ヴィクトール・リケッティ、ピエール＝ポール＝フランソワ・ル・メルシエ・ド・リヴィエール、ジョサイア・タッカー、ブロンデル夫人、アンヴィル公爵夫人、クレティアン＝ギヨーム・ド・マルゼルブ、ジョゼフ＝アルフォンス・ド・ヴィリエ神父、ルイ＝アレクサンドル・ド・ラ・ロシュフーコー公爵、ガブリエル・ボノ・ド・マブリ神父、ギヨーム＝フランソワ・ルトゥロンヌ、ジャン＝ニコラ・マルスラン・ゲリノー・サン＝ペラヴィ、アントワヌ＝ベルナル・カイヤール。テュルゴーは同書簡で「このほかの寄贈先は後日にお送りします」(Turgot [1770d], p. 383)と書いたが、ギュスターヴ・シェルはこれをつまびらかにしない。テュルゴーがデュボンに「後日お送り」とするといった抜刷の寄贈先のなかに、デイヴィッド・ヒュームの名があったかどうか興味のあるところである。ヒュームがテュルゴーに最大級の敬意を払っていたのと同様に、テュルゴーもまたヒュームに並々ならぬ敬意と友情の念を抱いていたから、テュルゴーが抜刷を送らないことは考えがたく、けだしアダム・スミス以上にヒュームの名前が見えないことは不可思議である。別言すれば、テュルゴーとヒュームとの交友関係に思いを致せば、よしんばスミスに抜刷を送らずとも、ヒュームに送らなかつたとは到底考えられない。按ずるに、テュルゴーはすでに本国に帰国しているヒュームには別ルート——例えば、パリ西郊のサン・ジェルマン・アン・レーを拠点としたいわゆる“ジャコバイト(英国史上最後のカトリック国王ジェームズ2世の支持者たち)”の手を借りて——で送ったと考えられないではないが確証はない。

ちなみに、テュルゴーがヒュームやスミスにくだんの抜刷を送ったどうか不明であるけれども、仮に抜刷を手にしていなかったとしても、スミスは『市民日誌』を定期購読していたことから、『諸省察』の全文または一部を読んでいたことが、スミス研究者や伝記作家などの調査・研究によって知られている。『国富論』に登場する「資本 (capital)」や「資本の使途 (employments of capital)」を論じた章の頁を繰くれば容易に理解できるというものである⁶⁷⁾。

一方、ヒュームはといえば、『政治論集』第2版の刊行を最後に、経済問題の論文を執筆することはなくなり、代わって『英国史』を完結したことから知れるように哲学者・倫理学者に加えて歴史家としての名声をほしいままにした。ヒュームがテュルゴーと書簡上の経済論争を行ったのは経済問題への関心を失って10年が経とうという時期のことであった。既述のとおり、テュルゴーとヒュームが取り交わした書簡の文面を比べてみると、テュルゴーが「貿易の嫉妬」というヒュームのタームを用いていることに示されるようにヒュームの論文に目を通していていると考えられるのに対して、ヒュームはといえば、テュルゴーといわず当時の知識人たちの手になる経済論文をそれほど——あるいはまったく——読んではいなかったと推察される。

だからであろうか、グルネーらの手によって1755年に刊行された『商業論

67) スミスがフランス語の作品を数多く読んでいたことはよく知られるところであり、かれの情報源として『市民日誌』を定期購読していたことは、ジェイムズ・ボナーこのかたスミスの蔵書目録からも確認できる。ホイグは水田洋『スミス蔵書目録』にもとづき、『市民日誌』1769年11,12月号に掲載された『諸省察』の第1節から第72節についてはすくなくとも承知していたに相違ないとのべている (Hoyng [2015], p. 124; Lundberg [1964], pp. 46-7)。とはいえ、ここでいう『諸省察』の最初の77節の内容は、ギュスターヴ・シェル編『テュルゴー全集』第2巻に収録されている『諸省察』とはかなり相違する。また、スミスの伝記作家のひとりイアン・シンプソン・ロスは「スミスの蔵書中にあるこの雑誌の一揃いには1769年の諸号が含まれており (Mizuta), したがって [スミス] はテュルゴーの本文の3分の2 [資本の5つ使途の終わる第70節前後] に接していたことになる。農業はもちろん製造業に投下される資本の増加の重要性に関する彼の直観もしくは所見に対して理論的支持を与えるものとしては、これだけで十分であつたろう」 (Ross [1995], p. 301. 訳322ページ) とのべている。そうであるとすれば、オーストラリアの新古典派経済学者ピーター・D. グレーネヴェーゲン主張はシュンペーター批判どころではなく最良の引き倒し以外の何物でもない。

説』で著者のリシャール・カンティヨンが「貿易財」と「非貿易財」とを明確に区別しつつ正貨の増減したがってまた貨幣供給量の増減の国内物価に及ぼす影響を考察したことを知らなかったのであろうか、それとも知っていたが無視したのであるか——そのいずれであってもひとつだけたしかなことは、『政治論集』第2版では「貿易収支」論には手を入れず、新たに「貿易の嫉妬」を書き加えたにすぎないという事実である。それゆえ、ヒュームの「貿易収支」論が最終的にどのような変化をとげることになったのかはこれを知りようがない。とどの詰まり、ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズの喝破するとおりの「相互に連絡のない論文のよせあつめ」の一本——あまりにも中途半端な一本のままでしかなかったのである。

ただそのヒュームにあってひとつだけ変わらなかったと確信をもっていえることはフランソワ・ケネー門への度し難いまでの不信心・敵愾心であった。とはいえ、ヒュームがフィジオクラート派の主張をどこまで正確に理解していたか、正直、解釈がむづかしい。それというのも、ヒュームはテュルゴーの一言半句を誇大解釈するか、さもなければ思い込みや誤解にもとづくものもすくなくないからである。

だからというべきか、あるいはそれにもかかわらずというべきか——はともかく、ヒュームはテュルゴー批判の手をすこしも緩めようとしない。かれが1769年7月10日アンドレ・モルレ神父に宛てた書簡がその好例であり、そこではテュルゴーをフィジオクラート派の誤った教義の信奉者であるだけでなく「ソルボニスト (Sorbonnist)」でもあると書き及んだ。ヒュームが「ソルボニスト」という言葉にパリ大学神学部同窓 (alumni) 以外の意味を込めたであろうことは、モルレ神父もまたテュルゴーの同窓であることを思えば容易に推察できる。ありていにいえば、ヒュームはフィジオクラシーを古いアリストテレス派哲学の独断主義の後継と看做しており、けだしテュルゴーを“頭の固い神学者”、“教条主義者”と決め付けたのである。

はたしてそうであるとすれば、ヒュームはとんでもない間違いをしでかしたことになる。テュルゴーが『諸省察』で利子論を展開する過程で、ソルボンヌ

の同窓たちの「教条的神学者の誤った教義」に与するどころか、反対にこれを容赦なく論破しているからにはほかならない⁶⁸⁾。テュルゴーの利子論は近代商業社会における事業資金の貸借——あるいは資金売買——の代価（またはコスト）であって、その支払いは事業利益を根拠とする。これに対して、“頭の固い神学者”たちのいう“Mutuum date nihil inde sperantes（与えよ、ただし見返りを期待する勿れ）”は古代の聖者の教えによるものであるというのであるが、それは現代の言葉で言い表せば金銭消費貸借の対価としての利子であって、両者は似て異なるものである。ちなみに、テュルゴーの利子論はケネーとフィジオクラート派最良で音に聞こえたヨーゼフ・A. シュンペーターでさえ、ヒュームをふくむ数ある利子論のなかでももっとも高く評価されるべきものであると説明してはばからない⁶⁹⁾。

68) テュルゴーは『諸省察』第72,73節のふたつの節において「貨幣貸付利子に関する誤った見解」と「教条主義神学者の反論の誤謬」について記している。これに、デュボンが『市民日誌』に『諸省察』の原稿を掲載するさい、著者のテュルゴーに無断で内容を改竄したうえ、「ある異論への回答 (Réponse à une objection)」と題された節を削除した。テュルゴーにはめずらしいことではあるが、1770年3月デュボンに送った書簡で激しく抗議している。テュルゴーの曰く——。「貴君は著者の断りもなく〔原稿を〕改竄したのです。支出を収入、節約を貨幣の蓄積が異なるものと思い込んでいますが、これら二組の言葉はそれぞれ同義語です。思想の曲解、むしろ誤った用語法というべきでしょう。それも、わが親愛なるドクトゥル〔・ケネー〕が初期の著作のなかで気づかなかった誤った表現のいくつかを故意に隠すために歪められた用語法にほかなりません。まさにセクト主義のなせる業です」(Turgot [1770c], p. 383)。そして、デュボンの改竄の結果、『諸省察』101の節ではなく、100の節からなる作品となった。筆者の依拠する『諸省察』は100の節からなるシュル版であり、デュボン版、デール＝デュシャル版はともに101の節からなる。なお、デュボンが削除したオリジナルテキスト（第75節）は、拙著『テュルゴー資本理論研究』の付録Ⅱ「テュルゴー利子論の補遺」の付録として再録したので参照されたい。

69) ヨーゼフ・A. シュンペーターはかれの死後未亡人らの手によって『経済分析の歴史 (History of Economic Analysis)』のタイトルで出版された未定稿のプライベートな読書ノートで、テュルゴーの利子論がデイヴィッド・ヒュームのそれをはるかに超える優れた理論であると高い評価をあたえたのちつぎのようにいっている。すなわち、「〔テュルゴーの利子論は〕18世紀が生んだもっとも偉大な業績であるのみならず、19,20世紀のもっとも偉大な思想の多くを先取りしていた」(Schumpeter [1954], p. 332)。けれど、テュルゴーの利子論はヒュームの業績として称えられる「自然利子率 (the natural rate of interest)」論をはるかに超える実質を備えていると見なければならないだけではない。そもそも、アントイン・E・マーフィーのいうように、ヒュームではなく、ジョセフ・マシーこそが「自然利子率」論の名家である (Murphy [2008], pp. 112-4)。ただし、ヒューム自身はマシーにただの一度も言及していない

1689年の名誉革命後、当時ヨーロッパ随一と謳われたオランダの金融市場に範をもとめたイギリス金融改革は、17世紀末から18世紀初頭におけるイングランド銀行（Bank of England）の設立と銀行券発行、南海泡沫（South Sea Bubble）などを経てようやく軌道に乗り、新たに誕生した金融機関による新しい金融商品・サービスが商人たちに提供されるようになった。そして、国王ジョージ3世治下の1773年にロンドン証券取引所（London Stock Exchange）が設立され、ロンドンの金融街シティー（City of London）がアムステルダムと並ぶヨーロッパ金融センターの一角を占めるにふさわしい礎石を築くことになったといわなくてはなるまい。

テュルゴーは1760年代末から70年代初頭に価値・価格、貨幣と利子にかかる重要な論稿を作成するもリアルタイムで世人の目にふれることはなかった。そこにはデュポンをはじめとするフィジオクラート派のお歴々はもとより、ヒュームやスミスもふくまれる。かれらは一様にテュルゴーの経済理論の進化をみることができなかった。そのなかにあつて、デュポンの手で改竄された『諸省察』のオリジナルが、たとえテュルゴーの友人や知人たちに限られたとはいえ、「小冊子」（抜刷）のかたちで読めるようになったことを忘れてはならないであろう。

だが不幸はつづく——。ヒュームにしろスミスにしろ、テュルゴーの価値論や利子論に関する論稿を手にすることができなかつただけではなく、フィジオクラート派の教義によって潤色される以前の『諸省察』を目にしたかどうか判然としないことである。テュルゴーが作成した『諸省察』の抜刷の寄贈先リストにヒュームやスミスの名を認めることができないからである。テュルゴーとの付き合いに思いを致せば、ヒュームやスミスに抜刷を贈らなかつたとは考えがたい。別の手段を使って寄贈したのかもしれないが、それとて証明する手ではない。

そのような状況下でも、ひとつだけたしかなことがある。それは、『諸省察』

だけでなく、ヒューム研究者のなかにあつても、マーフィーのようにマシーの名前に言及するものが多いとはいえない。

の原稿の改竄をきっかけとしてテュルゴーがフィジオクラート派に距離を置くようになったことである⁷⁰⁾。デュボンをはじめケネー門とのやり取りを示す書簡類は好例であるが、何よりもまず、1774年のケネーの死去にさしての沈黙と、最大限の敬意を込めて作成したグルネーの追悼文とを比較すれば、あまりに対照的といわざるを得ないであろう。

はたしてそうだとしても、フィジオクラート派のお歴々をことさら疎んじたわけではない。この年8月、テュルゴーが財務総監に就任して組閣に取り組んだ時、大親友のマルゼルブ、ジュネーヴ出身の銀行家ジャック・ネッケルなどともに、ピエール＝サミュエル・デュボンらの名が見えることがその証である。テュルゴーは、その人間が自らと思想信条、信仰を異にするからといって排斥することなく、有為の人材であれば喜んで受け容れたという。セクト嫌いで「孤高の思想家 (*penseur solitaire*)」テュルゴーの面目躍如である⁷¹⁾。

この点、敬虔なカトリック教徒ではあるが“頭の固い神学者”、“教条主義者”を厭うテュルゴーという人物を、ヒュームは明らかに見誤ったの感がある。も

70) テュルゴーは時にケネーとフィジオクラート派に辛辣な批評をすることがあったが、基本的にはかれらに心底敵意を抱くことはなかった。ところが、デュボンによる『諸省察』の原稿改竄を契機に雲行きが変わったように見受けられる。例えば、テュルゴーは1771年2月25日にデュボンに送った書簡でこういつていた。「不幸にして、ふたりの巨匠〔ケネーとミラボー侯爵〕は言語 (*langage*) と文法 (*grammaire*) [中略] の分析には秀でた成果を残していません。これらを論ずるには、セクト主義 (*esprit de secte*) の忌み嫌う精神の白紙状態 (*tabula rasa*) からはじめなければなりません」(Turgot [1771], p. 474)。手塚壽郎はその意味するところをつぎのように説明している。すなわち、まず「此の峻烈なる手紙」において、と手塚はいう。「此の峻烈なる手紙において、テュルゴーの批判の矛先は“TABULA RASA”を忌み嫌うフィジオクラート派の面々を越えてケネーその人にも向けられるようになった」(手塚 [1933], 6 ページ)。わずか1,2年前にはテュルゴーがデュボンをはじめフィジオクラート派の面々に書簡を送ったおり、文末に「親愛の情をわれらがケネー博士に送ります (*mille amitiés à notre docteur*)」といったフレーズがみえたものである。シュンペーターは『経済分析の歴史』において、「テュルゴーはフィジオクラート派ではなかったが、かれらにシンパシーを抱いていた」(Schumpeter [1954], p. 244) といったものだが、はたしてそれが正しいとすれば、デュボンによる『諸省察』の改竄はテュルゴーの「シンパシー」を失わせしめる衝撃的かつ決定的な“事件”であったというべきであるかもしれない。

71) 「孤高の思想家」という表現はオーギュスト・ブショーの「追悼演説」から借りたものである (Bouchot [1846], p. 14 参照のこと)。

ちろんだからといって、テュルゴーはいつまでも根に持つ狭量・偏竊な質ではなかったから、師グルネーの謂いではないが、“Laissez passer”（無かったことにしよう）と軽くいなしたことであろう。テュルゴーにとって最大の不幸は、ヒュームの論争相手としては若すぎたことであった。テュルゴーの後見人のひとりであるヴォルテールがつねづね心配していたことが、テュルゴー＝ヒューム論争にあっても避けられなかったというべきかもしれない⁷²⁾。（完）

（2020年4月24日世田谷の自宅にて脱稿）

参考文献

- Arkin, Marcus [1956], “The Economic Writings of David Hume — A Reassessment”, *South African Journal of Economics*, 24, September, reprinted in Mark Blaug (ed.), *David Hume (1711–1776) and James Steuart (1712–1780)*, *Pioneers in Economics*, Vol 11, Edward Elgar, Aldershot, 1991.
- Baudrillard, Henri [1846], “Turgot”, *Revue des Deux Mondes*, Période initiale, tome 14: réimpression FB Editions, printed in Great Britain by Amazon.
- Bouchot, Auguste [1846], “Éloge de Turgot, discours qui a obtenu la première mention dans la séance du 10 septembre 1846”, Paris, Académie française”, date la première édition 1846: Source: gallica.bfn.fr/Bibliothèque nationale de France.
- Brewer, Anthony [1986], *Richard Cantillon: Pioneer of Economic Theory*, London, Routledge: reprint, 2002.

72) 『テュルゴー全集』の編者ギュスターヴ・シエルは各巻の冒頭でテュルゴーの年記と作品を解説しているが、テュルゴーが1761年にモージュの地方長官に就任した旨の報告を受けたヴォルテールは「貴君〔テュルゴー〕が財務総監になる日がやがてくるであろう。余はその時この世にはいないだろうけれども」（Schelle [1914], pp. 1–2）と書き送った。それから12年後の1774年8月、フェリックス・カデによれば、「テュルゴー財務総監就任」の報を受けたヴォルテールは「なんと不幸な報せをよこしたことか！」と大声で叫び嘆き悲しんだといわれる。テュルゴーが清濁併せ呑む人間であっても、清廉な人柄であったうえ、あまりに若くして「伝統社会 (société traditionnelle)」の要職に就き成果をあげたことがヴォルテールのいわゆる「不幸」の謂いである。なるほどテュルゴーの生涯をふり返ると、若干20歳でソルボンヌの代表に就任、直後に尊父ミシェル＝エティエンヌの死によって法曹界入りしてのち、リモージュ地方長官の得たのが35の歳、そして財務総監の職を国王ルイ16世より拝命したのが47歳であった。かれの「不幸」は、ヴォルテールの予想したとおり2年足らずでその職を退いたことではなく、教会、法曹界、政界といった「伝統社会」にあってあまりに若くして「トップに上り詰めた」ところにある。テュルゴーはその若さのゆえかれの功績に相当の評価をあたえられなかっただけでなく、かえって周囲の小人・凡人の妬み嫉みのターゲットになった。ヴォルテールはその意に相違して、テュルゴーの財務総監の「就任と失脚」を期せずして目撃したことを生涯の「不幸」と見付けたのかもしれない (Lundberg [1964], pp. 1–2)。

- Burton, John Hill [1846], *Life and Correspondence of David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh, and Other Original Sources*, Vol. I and II, Edinburgh; Classic Reprint, Forgotten Books, 2012.
- Burton, John Hill [1849], *Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Burton, John Hill [1860], *The Book-Hunter*, Edinburgh, George Routledge and Son, February: A New Edition with a Memoir of the Author; Fili-Quarian Classics, 12 May 2010. 村上清訳『書物の狩人』ビブリオフィル叢書, 図書出版社, 1993 年
- Cantillon, Richard [1755], *Essai sur la nature du commerce en général*: réimpression de l'édition de 1952 (sous la direction d'Alfred Sauvy avec le préface d'Antoin E. Murphy), fondée sur le texte original (*Essay sur la nature du commerce général*, à Londres, Chez Fletcher Gyles, dans Holborn) de 1755, avec études et commentaires revues et augmentées, Institut national d'études démographiques (I.N.E.D.), Paris, 1997.
- Cesarano, Filippo [1998], "Hume's specie-flow mechanism and classical monetary theory: An alternative interpretation", *Journal of International Economics* 45; reprint in F. Cesarano, *Monetary Theory in Retrospect: The selected essays of Filippo Cesarano*, London/New York, Routledge, 2007.
- Dostaler, Gilles [2012a], "David Hume, de la nature humaine à l'étalon-or", dans: G. Dostaler, *Les grands auteurs de la pensées économiques*, Paris, Alternatives Economiques Poche n° 57, octobre 2012.
- Dostaler, Gilles [2012b], "Turgot, théoricien du capitalisme, avocat du libéralisme", dans: G. Dostaler, *Les grands auteurs de la pensées économiques*, Paris, Alternatives Economiques Poche n° 57, octobre 2012.
- Dostaler, Gilles [2012c], "Vincent de Gournay, précurseur du libéralisme et protectionniste", dans: G. Dostaler, *Les grands auteurs de la pensées économiques*, Paris, Alternatives Economiques Poche n° 57, octobre 2012.
- Galiani, Ferdinando [2005 (1751)], *Della Moneta/De la monnaie*, édité et traduit sous la direction d'André Tiran et traduction coordonnée par Anne Machet, Paris, Editions Economica.
- Gournay, Jacques Vincent de [2008 (1754)], *Remarques sur le commerce de Josiah Child; suivies des Remarques de Jacques Vincent de Gournay: text intégral d'après les manuscrits*, édition et préface de Simone Messonnier, Paris, Édition L'Harmattan.
- Groenewegen, Peter D. [1970], "A reappraisal of Turgot's theory of value, exchange and price mechanism", *History of Political Economy*, 2(1), reprinted in Mark Blaug (ed.), *Richard Cantillon (1689–1734) and Jacques Turgot (1727–1781)*, Pioneer in Economics, Vol. 9, Edward Elgar, Aldershot, 1991.
- Gallais-Hammon, Janine [1982], "Le premier exemple d'un concept économique en extension et en compréhension: le concept de capital travaillé par Turgot", dans: Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et de sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publications de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Greig, J. Y. T. (ed.) [1932], *The Letters of David Hume*, Volume I (1727–65) and II (1766–76),

- Oxford and New York, Oxford University Press: First published paperback 2011.
- Hayek, Friedrich A. Von [1932], “Sur l’*Essai sur la nature du commerce en général* de Richard Cantillon, édité avec une traduction anglaise à Londres en 1931, *Economic Journal*, vol. XLII; reprint, Hayek’s Introduction to “Richard Cantillon”, *Journal of Libertarian Studies*, vol. VII, No. 2, Fall 1985; <https://oll.libertyfund.org/pages/hayek-on-richard-cantillon>.
- Higgs, Henry [1931], “Life and work of Richard Cantillon”, in Higgs (ed.), *Richard Cantillon, Essai sur la nature du commerce en général*, London, Royal Economic Association: reprint, Augustus Kelly, New York, 1964.
- Hoyng, Anne-Claire [2012], “Résumé français”, présenté au Séminaire autour d’A.-C. Hoyng et Janine Gallais-Hamonne: “Adam Smith a-t-il plagié Turgot?”, Institut Turgot, Paris, le 23 mai: <http://blog.turgot.org/index.php/?post/Hoyng-1>
- Hoyng, Anne-Claire [2015], *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité*, Paris, Honoré Champion: Champion Essais 44.
- Hume, David [1752], *Political Discourses* (Edinburgh): reprinted in Japan, *Hume’s Political Discours with an Introduction by William Bell Robinson*, Amazon, September 2019.
- Hume, David [1776], *The Life of David Hume, Esq., written by Himself*, London: reprint in USA, *My Own Life*, Fugazi Press, May 2012.
- Hume, David (1955), *David Hume Writings on Economics*, ed, Eugene Rotwein, Edinburgh, Nelson and Sons: Transaction Publishers; Revised edition with a New Introduction with Margaret Schabas, December 15, 2006).
- Hutchison, Terence Wilmot [1982], “Turgot and Smith”, dans: Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d’un séminaire organisé par la Faculté de droit et des sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publication de la Faculté de droit et de sciences économiques de l’Université de Limoges.
- Jessua, Claude [1991], *Histoire de la théorie économique*, Paris, Presses Universitaires de France.
- Jevons, William S. [1881], “Richard Cantillon and the nationality of political economy”, *Contemporary Review*, reprinted in Henry Higgs (ed.) [1931], *Richard Cantillon, Essai sur la nature du commerce en général*, London, Royal Economic Association (reprinted, Augustus Kelly, New York, 1964). 高野利治訳「カンティオン論 (ジェヴォンズ)」, H. W. スピーゲル著, 越村信三郎・伊坂市助監訳『経済思想発達史』I (経済学の黎明), 東洋経済新報社, 1954年, 所収.
- Klinbansky, Raymond and Ernest C. Mossner (eds.) [1954], *New Letters of David Hume*, Oxford, Oxford.
- Lundberg, I. C. [1964], *Turgot’s Unknown Translator: The Réflexions and Adam Smith*, The Hague, Martinus Nijhoff.
- Mayer, Thomas [1980], “David Hume and Monetarism”, *Quarterly Journal of Economics*, 95(1), August, in Mark Blaug (ed.), *David Hume (1711–1776) and James Steuart (1712–1780)*, Pioneers in Economics, Vol 11, Edward Elgar, Aldershot, 1991.
- Meyssonier, Simone [2008], “Présentation”, dans: *Traité sur le commerce de Josiah Child: suivi des Remarques de Vincent de Gournay*, Edition et préface de Simone Meyssonier, Paris, Editions L’Harmattan.
- Morellet, André (l’abbé) [1821], *Mémoires de l’abbé Morellet inédits sur le Dix-huitième siècle et sur la Révolution*, deuxième édition (1822), considérablement augmentée par Pierre Edouard

- Lémontey, Paris, Librairie française de Ladvocat (Slatkine reprint, 1967): *Mémoires de l'abbé Morellet*, Paris, Mercure de France, 2000: Collection <Le Temps Retrouvé>. 鈴木峯子訳「十八世紀とフランス革命の回想」, 『自伝・回想録——十八世紀を生きて』(ただし抄訳), 中川久定・村上陽一郎責任編集「十八世紀叢書」I, 国書刊行会, 1997年, 所収。
- Mossner, Ernest Campbell (ed.) [1954], *The Life of David Hume*, Oxford/New York, Oxford University Press.
- Mossner, Ernst Campbell and Ian Simpson Ross (eds.) [1977(1987)], *The Correspondence of Adam Smith*, Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford, Oxford University Press, 1977: reproduced in paperback by The Liberty Fund, Indianapolis: Indiana, 1987.
- Murphy, Antoin E. [1997], “Préface à l'Essai sur la nature du commerce en général”, dans: Cantillon, Richard [1755], *Essai sur la nature du commerce en général*; réimpression de l'édition de 1952 (sous la direction d'Alfred Sauvy) avec le préface d'Antoin E. Murphy, fondé sur le texte original (*Essai sur la nature du commerce en général*, à Londres, Chez Fletcher Gyles dans Holborn) de 1755, avec études et commentaires revus et augmentés, Paris, Institut national d'études démographiques (I.N.E.D.).
- Murphy, Antoin E. [2009], “David Hume: The Classical Theory of Money”, in Antoin E. Murphy, *The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*, Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Ravix, Joël-Thomas et Paul-Marie Romani [1997], “Le <système économique> de Turgot”, dans: *Turgot: Formation et distribution des richesses, textes choisis et présentés par Ravix et Romani*, Paris, GF Flammarion.
- Rae, John [1895], *Life of Adam Smith*, London and New York, Macmillan Company; reprint, Cosimo Classics, New York, 2006. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店, 1972年。
- Ross, Ian Simpson [1995], *The Life of Adam Smith*, Oxford, Clarendon Press. 篠原久他訳『アダム・スミス伝』シュブリンガー・フェアラーク東京, 2000年。
- Ruwet, Joseph (sous la direction de), Jean-Paul Depouhon-Ninnin et Paul Servais (avec la collaboration de) [1976], *Lettres de Turgot à la duchesse d'Enville (1764–74 et 1777–80)*, Edition critique préparée par les étudiants en histoire de l'Université Catholique de Louvain: Section d'histoire -16/I, Louvain, Presses Universitaires de Louvain, janvier.
- Schelle, Gustave [1914], “Turgot – sa vie et ses œuvres: Turgot intendant de Limoges (1761–1774)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Smith, Adam [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited, with introduction, notes, marginal summary and an enlarged index by Edwin Cannan, M. A., New York, Randam House, 1937; reprinted 1965. 大河内一男訳『国富論』, 『世界の名著』31, 中央公論社, 1968年。
- Smith, Adam [1976(1776)], *An Inquiry into the Nature and of Causes the Wealth of Nations*, Volume I and II, edited by Richard H. Campbell, Andrew S. Skinner and William B. Todd, Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford, Oxford University Press: reproduced in paperback by The Liberty Fund, Indianapolis: Indiana, 1981.
- Smith, Adam [1790(1779)], *The Theory of Moral Sentiments* (Sixth Edition), edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith,

- Oxford, Oxford University Press, 1976: reproduced in paperback by The Liberty Fund, Indianapolis: Indiana, 1979. 米林富男訳『道德情操論』上・下, 未来社, 1969年。
- Turgot, Anne Robert Jacques [1749], “Lettre à l’abbé de Cicé du 7 avril, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1753–1754], “Plan d’ouvrage sur le commerce, la circulation, l’intérêt d’argent et la richesse d’états”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1759a], “Éloge de Vincent de Gournay”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome I, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1759b], “Éloge de Vincent de Gournay”, *Œuvres de Turgot*, nouvelle édition classée par ordre de matière avec les notes de Du Pont de Nemours augmentée de lettres inédites, des questions sur le commerce, et d’observations et notes nouvelles par Eugène Daire et Hippolyte Dussard, t. 1, réimpression de l’édition 1884: reprint, Osnabrück, Otto Zeller, 1966.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766a], “Programme d’un Concours [de la Société d’Agriculture de Limousin] sur l’impôt indirect (Limoges, juillet)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766b], “Lettre à Hume du 23 juillet, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766c], “Lettre à David Hume du 27 juillet, à Paris, au soir”, in *Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume: From the Paper Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh* edited by John Hill Burton, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints, Kessinger Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766d], “Lettre à Hume du 7 septembre, Paris”, in John Hill Burton [1849], *Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766e], *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, septembre, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767a], “Observation sur les mémoires récomposés par la Société d’Agriculture de Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767b], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 3 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767c], “Lettre à Hume du 25 mars, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767d], “Lettre à Hume du 1 juin, Paris”, in John Hill Burton [1849], *Letters of Eminent Persons Addressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood

- and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767e], “Lettre à Hume du 3 juin, Paris”, in John Hill Burton [1849], *Letters of Eminent Persons Adressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1768a], “Lettre à Hume du 8 mars, Paris”, in John Hill Burton [1849], *Letters of Eminent Persons Adressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1768b], “Lettre à Hume du 3 juillet, Paris”, in John Hill Burton [1849], *Letters of Eminent Persons Adressed to David Hume: From the Papers Bequeathed by His Nephew to the Royal Society of Edinburgh*, Edinburgh and London, William Blackwood and Son, MDCCCXLIX (1849): Kessinger Legacy Reprints Publishing, 10 September 2010.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1769a], “Lettre à l’abbé [André] Morellet du 25 juillet, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1769b], “Valeurs et monnaies (Projet d’article)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770a], “Lettre à M^{lle} [Jeanne Julie Éléonor] Lespinasse du 26 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770b], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 30 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770c], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 23 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770d], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 29 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1771], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 15 février, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1778], “Lettre au Docteur Price du 22 mars, Paris”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- 黒木龍三 [2018], 「テュルゴーの資本理論：差額地代と土地価格との関係で」, 立教大学経済学会『経済学研究』第71巻第3号, 所収。
- 中川辰洋 [2011], 『ジョン・ローの虚像と実像——18世紀経済思想の再検討——』(青山学院大学経済研究所研究叢書7) 日本経済評論社。
- 中川辰洋 [2013], 『テュルゴー資本理論研究』日本経済評論社。平成25年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業(科学研究費助成金)(研究成果公開助成金「学術図書」)(課題番号255151)

- 中川辰洋 [2016], 『カンティヨン経済理論研究』 日本経済評論社。平成 28 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業 (科学研究助成金) (成果研究公開助成金「学術図書」) (課題番号 16HP5144)
- 中川辰洋 [2018], 「書評 Hoyng, Anne-Claire, *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité.* (Champion Essais 44) 216 p. 2015 (Champion, FR)」, 経済学史学会『経済学史研究』第 59 巻第 2 号, 1 月, 所収。
- 中川辰洋 [2019a], 「書評 ジョン・ヒル・バートン著『書物の狩人』, 図書出版社 (村上清), 1993 年」, 青山学院大学経済学会『青山経済論集』第 70 巻第 4 号, 2019 年 3 月, 所収。
- 中川辰洋 [2019b], 『テュルゴーとアダム・スミス』 日本経済評論社。
- 中川辰洋 [2019c], 「テュルゴー経済理論初期研究の再検討——A. プシヨー『テュルゴー追悼演説』を手掛かりに——」, 青山学院大学経済学会『青山経済論集』第 71 巻第 3 号, 9 月, 所収。
- 手塚壽郎 [1927], 「グルネーの経済思想 (其一〜六)」 神戸高等商業学校『国民経済雑誌』第 44 巻第 1, 2, 3, 4 巻, 第 45 巻第 1, 2 號, 所収。
- 手塚壽郎 [1929], 「ガリアニの Della Moneta に就て」, 神戸高等商業学校『国民経済雑誌』第 47 巻第 2 號, 所収。
- 手塚壽郎 [1933], 「心理的経済價值説の歴史的研究の一節——テュルゴーの Valeurs et monnaies の想源に就いて」, 福田徳三博士追憶論文集 (神戸高等商業学校『国民経済雑誌』第 55 巻第 2 號), 所収。
- 渡辺健一 [2012], 「ヒュームの正貨流出入機構と国際金本位制」, 成蹊大学経済学会『成蹊大学経済学部論集』第 43 巻 1 号, 所収。
- 渡辺恭彦 [1967], 「テュルゴーの経済理論の思想的構造」, 福島大学経済学会『商學論集』第 36 巻第 1 号, 所収。

付録 アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーおよびデイヴィッド・ヒューム年譜

年	アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴー	デイヴィッド・ヒューム
1711		4月26日にジョゼフ・ヒュームとキャサリンの3男として生まれる（スコットランド、エジンバラ市）
1713		父ジョゼフ死去
1723		エジンバラ大学入学（当時12歳） （アダム・スミス、6月16日スコットランドのカーコルディに生まれる）
1725		エジンバラ大学退学（実質的には卒業）。以後、自宅にて哲学の研究をつづける
1727	5月10日にミシェル＝エティエンヌ・テュルゴーとマドレーヌ＝フランソワーズ・マルティノーの3男として生まれる（パリ市）	
1729		神経衰弱の症状に苦しむ（～1730）
1734		2月末上京。『医師への書簡』執筆。プリストルのとある商会に就職するも同年夏退職。その後フランスのパリ、ランスを旅行
1735		秋頃、フランス西部のアンジュー地方の都市ラ・フレッシュを訪れ逗留（～1737）。当地のラ・フレッシュ学院で講義を聴講、同時に『人性論』の執筆を開始
1736		フランスから帰国。ロンドンで『人性論』の出版に専心
1739		『人性論』第1,2篇出版（ただし当初匿名）
1740		『人性論摘要』および『人性論』第3篇出版（この頃アダム・スミス、『人性論』を読み、ヒュームに傾倒）
1741		『道徳政治論集』（第1版）刊行（ただし匿名）
1744		エジンバラ大学の道徳および形而上学正教授に推挙されるも辞退
1745		4月、アナンデル侯爵家の家庭教師。この頃、神経疾患を訴える
1746	パリ大学神学部受験のための年齢免除資格を取得 （ディドロ『哲学思考に関する諸省察』刊行）	4月アナンデル家を辞し上京。5月セント・クレア中將の法務官として北仏ブルターニュ遠征。一旦帰国後、同中將の軍事施設団の副官としてウィーン、トリノを訪問（～1747）
1747	同学位論文口頭審査受験	
1748	サン＝シュルピス神学校入学	『人間知性に関する哲学論集』刊行（ただし匿名。1758年に『人間知性論』に改題）
1749	ソルボンヌ修道院に加わる ・友人シセ兄弟の長兄に「ジョン・ローの紙幣政策」批判の手紙を送る（テュルゴー初の経済問題論文）	年末帰国、ロンドンに転居。母キャサリン死去。爾來2年間、兄ジョン宅に住む

1750	(モンテスキュー『法の精神』発表) 神学士号取得講演をラテン語で行う (7月, 12月)	アダム・スミスと対面(以後ヒュームが亡くなるまで交友関係つづく)
1751	父ミシェル＝エティエンヌ死去(享年60歳)	『道徳原理研究』刊行 ・グラスゴー大学の論理学正教授ポストの推薦に失敗(以後スミスが就任する1762年までポストは空席)
1752	パリ高等法院検事総長補の職に就く。のち同法院参事・裁判所請願受理院, 同請願受理委員などの職を歴任 (ディドロ, ダランベールら『百科全書』刊行開始)	『政治論集』刊行(ただし匿名) ・エジンバラ弁護士協会図書館司書官に就任(～1757)。この時期, 名著『英国史』の原稿を書き始める
1753		グラスゴー大学で『商業論』について講演
1754	当時商務局商務監督官ヴァンサン・ド・グルネーの知遇を得る	『英国史』第1巻刊行
1755	ジョサイア・タッカーの自由貿易に関する論文の仏語訳を完成 (カンティヨン『商業一般の本性に関する論説』刊行)	
1756	(モンテスキュー死去(享年66歳))	『英国史』第2巻刊行(ヴォルテール, 『英国史』を絶賛, 以後ヒュームの名声が国の内外で高まる)
1757	(七年戦争勃発(～1763))	
1758	『百科全書』に「大市」などの論稿を寄稿(ケネー『経済表』の「原表」発表)。ケネーのサロンに顔を見せるようになる	
1759	グルネー死去(享年47歳)。追悼文「ヴァンサン・ド・グルネー頌」を発表	『英国史』第3,4巻刊行 (スミス『道徳情操論』初版刊行)
1760	スイスにヴォルテールを訪ねるなどして行政官職の取得に協力を要請	
1761	フランス中部のリモージュ地方長官に就任(～1774)	
1762	ラ・ロシュフーコー家との交流はじまる ・リモージュの改革を継続する見地からリヨンへの転任を拒否 (ルソー『社会契約論』発表)	『英国史』第5,6巻刊行 (スミス『道徳情操論』第2版刊行) (スミス, グラスゴー大学の論理学教授に任命。就任講演「観念の起源」をラテン語で行う。翌年, 道徳哲学教授に転任)
1763		6月駐仏英国大使のハートフォード卿コンウェーによりパリで秘書官のポストを薦められ, 10月赴任。以後, 生涯の友となるダランベール, ディドロ, テュルゴー, アンドレ・モルレら多数の知識人・思想家と交流 (このころからスミス『国富論』の草稿執筆開始)

テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム（下）

1764	「ケネー『租税』論に関する研究ノート」作成（ただし未発表） ・このころパリと任地の間を頻繁に往復	（4月スミス、政治家チャールズ・タウンゼンドの義理の息子バックラー公爵ヘンリー・スコットの家庭教師として渡仏、1766年10月までジュネーヴ、パリなどを歴訪）
1765	フィジオクラート派の機関誌『市民日誌』編集者ピエール＝サミュエル・デュボンと出会う	7月、コンウエー大使の正式秘書官、代理大使となる ・12月、パリのサロンでジャン＝ジャック・ルソーと出会う
1766	アンドレ・モルレ神父、デイヴィッド・ヒュームらを介して、フランス滞在中のアダム・スミスと出会う ・商務監督官トリュデースに製造業振興策を献策 ・『富の形成と分配に関する諸省察』脱稿（11月）（以下『諸省察』と略記） ・ノルマンディー地方のオースに土地を購入。オース男爵（baron de l'Aulne）	1月、フランスから帰国。この時ルソーが同行。以後、両者の関係が急速に悪化（ヒューム＝ルソー事件）、絶縁 （スミス『道徳情操総論』第4版刊行）
1767	リモージュ農業振興協会の懸賞論文制度を創設（サン＝ペラヴィ論文入選、ナントの徴税請負人グラスランは次点）	ハートフォード卿の実弟ヘンリー・シーモア・コンウエー將軍の北部担当國務大臣就任を機に、乞われて次官の職に就く （スミス『道徳情操論』第3版刊行、『国富論』の草稿執筆再開） （ジェームズ・ステュアート『経済学原理』刊行）
1768	モルレの要請で「価値と貨幣」に関する論稿を執筆（ただし未定稿）	1月、同次官辞任
1769	フィジオクラート派機関誌『市民日誌』に『諸省察』発表（11、12月および1770年1月号）。ただし、デュボンがオリジナルテキストを大幅に改竄。テュルゴーは怒り、オリジナルテキストの「抜刷」150部の作成、関係者への送付をデュボンに要求	政治・外交の世界から引退、エジンバラに居を構え文筆活動に勤しむ
1770	アングレームの高利詐欺事件の公式報告書「貨幣貸付に関する覚書」作成（テュルゴーはこれを『諸省察』の一部と位置づける）	
1771	リモージュの飢饉深刻化、パリに出向いて救済策を進言	
1773		（スミス、『国富論』出版のためロンドンに向かうも途中衰弱がひどく、ヒュームに「遺言」を告げる） （スミス『道徳感情論』第4版刊行）
1774	（国王ルイ15世崩御。ルイ16世、新国王に就任） ・海軍大臣（7月）、財務総監（8月）に就任。	

	穀物貿易自由化など改革案を発表。 (ケネー、12月16日ヴェルサイユで死去。享年80歳) ・穀物政策をはじめテュルゴの改革案に不満続出 初のドイツ語訳『諸省察』刊行 (ルイ16世聖別式)	
1775	(アメリカ独立戦争起こる)	(スミス『国富論』初版刊行。3月9日)
1776	人頭税の廃止(1月5日)、3月に6つの勅令を国王に献策するも、ルイ16世はこれを拒絶、5月12日テュルゴの職を解く(テュルゴの失脚)。これを機に、政界から身を引き、フランス碑文文芸アカデミー副会長のポストを引き受けるかたわら、歴史、哲学、文学そして物理学の研究を行う ・『諸省察』刊行(ただし作者匿名)	4月、『自叙伝』刊行 ・8月25日エジンバラの自宅にて死去(享年65歳)。4日後の8月29日市内カールトン・ヒル墓地に埋葬
1777	(訳者不詳の仏語訳『国富論』(通称、ラ・エ(オランダ・ハーグ)版)刊行	(スミス、ヒューム『自叙伝』の「あとがき」執筆)
1778	(ヴォルテール死去(享年83歳)) (ルソー死去(享年66歳)) (アンドレ・モルレ、『国富論』を仏訳(1780年?の説あり)。ただし出版せず)	(スミス『国富論』第2版刊行)
1779	(・ジャン＝ルイ・ブラヴェ、1779年から80年に『農工商財雑誌』に『国富論』の仏語訳を発表。82年製本してスミスに寄贈)	
1780		(ジェイムズ・ステュアート死去(享年73歳))
1781	持病の痛風が悪化、パリの自宅にて死去(3月18日。享年53歳)。尊父ミシェル＝エティエンヌと同じ疾病者救済院の墓地に埋葬 (デュボン、『テュルゴ伝』刊行)	(スミス『道徳感情論』第5版刊行)
1782	(コンドルセ『テュルゴ氏の生涯』刊行)	
1783	(ダランベール死去(享年66歳))	
1784	(ディドロ死去(享年71歳)) 新版『諸省察』刊行	
1786		(スミス『国富論』第3版刊行)
1788		(スミス『国富論』第4版刊行)
1789	フランス革命勃発(7月14日)	
1790		(スミス『国富論』第5版およびアメリカ版初版刊行、『道徳感情論』第6版刊行) (スミス、エジンバラにて死去(7月17日。享年67歳)。市内キャノンゲート墓地に埋葬)

注：カッコ内は関連事項や出来事を示す。